

(3) 心理的項目 (表 3)

①うつ

要支援者については、うつ傾向群は 922 人 (59.3%)、非うつ傾向群は 633 人 (40.7%) であり、要介護 1 者については、うつ傾向群は 1,009 人 (74.4%)、非うつ傾向群は 348 人 (25.6%) であった。要支援者に比べ要介護 1 者の方が有意にうつ傾向群の占める割合が多かった ($p < 0.001$)。

②主観的健康感

要支援者については、非健康群は 1,005 人 (64.6%)、健康群は 550 人 (35.4%) であり、要介護 1 者については、非健康群は 932 人 (68.7%)、健康群は 425 人 (31.3%) であった。要支援者に比べ要介護 1 者の方が有意に非健康群の占める割合が多かった ($p = 0.022$)。

③生きがい

要支援者については、生きがいなしの者は 777 人 (50.0%)、生きがいありの者は 778 人 (50.0%) であり、要介護 1 者については、生きがいなしの者は 829 人 (61.1%)、生きがいありの者は 528 人 (38.9%) であった。要支援者に比べ要介護 1 者の方が有意に生きがいなしの者の占める割合が多かった ($p < 0.001$)。

表3 平成16年度調査時の心理的項目 n=2,912

項目		要支援	要介護1	P値
うつ	うつ傾向群	922 (59.3)	1,009 (74.4)	0.000
	非うつ傾向群	633 (40.7)	348 (25.6)	
主観的健康感	非健康群	1,005 (64.6)	932 (68.7)	0.022
	健康群	550 (35.4)	425 (31.3)	
生きがい	なし	777 (50.0)	829 (61.1)	0.000
	あり	778 (50.0)	528 (38.9)	

注) 数字(): 数字は人数、()内は%を表す

(4) 社会的項目 (表4)

①老研式活動能力指標得点

要支援者は 8.4±3.3 点、要介護1者は 6.1±3.5 点であり、要支援者に比べ要介護1者の方が有意に低かった (p<0.001)。

②趣味

要支援者については、趣味なしの者は 663 人 (42.6%)、趣味ありの者は 892 人 (57.4%) であり、要介護1者については、趣味なしの者は 781 人 (57.6%)、趣味ありの者は 576 人 (42.4%) であった。要支援者に比べ要介護1者の方が有意に趣味なしの者の占める割合が多かった (p<0.001)。

③近所付き合い

要支援者については、なし群は 142 人 (9.1%)、あり群は 1,413 人 (90.9%) であり、要介護1者については、なし群は 242 人 (17.8%)、あり群は 1,115 人 (82.2%) であった。要支援者に比べ要介護1者の方が有意になし群の占める割合が多かった (p<0.001)。

④外出頻度

要支援者については、1週間に1回未満群は 231 人 (14.9%)、1週間に1回以上群は 1,324 人 (85.1%) であり、要介護1者については、1週間に1回未満群は 373 人 (27.5%)、1週間に1回以上群は 984 人 (72.5%) であった。要支援者に比べ要介護1者の方が有意に1週間に1回未満群の占める割合が多かった (p<0.001)。

⑤家の中の段差による行動制限

要支援者については、行動制限ありの者は 428 人 (27.5%)、行動制限なしの者は 1,127 人 (72.5%) であり、要介護1者については、行動制限ありの者は 522 人 (38.5%)、行動制限なしの者は 835 人 (61.5%) であった。要支援者に比べ要介護1者の方が有意にありの者の占める割合が多かった (p<0.001)。

⑥家から出るときの段差による行動制限

要支援者については、行動制限ありの者は 377 人 (24.2%)、行動制限なしの者は 1,178 人 (75.8%) であり、要介護1者については、行動制限ありの者は 539 人 (39.7%)、行動制限なしの者は 818 人 (60.3%) であった。要支援者に比べ要介護1者の方が有意にありの者の占める割合が多かった (p<0.001)。

表4 平成16年度調査時の社会的項目

n=2,912

項目		要支援	要介護1	P値
老研式活動能力指標得点	平均±SD	8.4 ± 3.3	6.1 ± 3.5	0.000
趣味	なし	663 (42.6)	781 (57.6)	0.000
	あり	892 (57.4)	576 (42.4)	
近所付き合い	なし群	142 (9.1)	242 (17.8)	0.000
	あり群	1,413 (90.9)	1,115 (82.2)	
外出頻度	1週間に1回未満群	231 (14.9)	373 (27.5)	0.000
	1週間に1回以上群	1,324 (85.1)	984 (72.5)	
家の中の段差による行動制限	あり	428 (27.5)	522 (38.5)	0.000
	なし	1,127 (72.5)	835 (61.5)	
家から出るときの段差による行動制限	あり	377 (24.2)	539 (39.7)	0.000
	なし	1,178 (75.8)	818 (60.3)	

注) 数字 (): 数字は人数、()内は%を表す

ii 調査2：市町村に対する要支援者および要介護1者の
2年後の要介護度の調査

1) 2年後の要介護度の推移 (表5)

要支援者については、改善・維持群は609人(53.4%)、悪化群は531人(46.6%)であり、要介護1者については、改善・維持群は634人(71.9%)、悪化群は248人(28.1%)であった。要介護1者に比べ要支援者の方が有意に悪化群の占める割合が多かった ($p < 0.001$)。

表5 要介護度別の2年後の要介護度の推移

	n=2,022		
	改善・維持群	悪化群	P値
要支援	609 (53.4)	531 (46.6)	0.000
要介護1	634 (71.9)	248 (28.1)	

注) 数字は人数、()内は%を表す

iii 調査1と調査2の統合

平成16年度初回調査時の基本属性、身体・心理・社会的項目別にみた 2年後の要介護度の推移

平成16年度初回調査の調査票の送付数は、要支援は5,130人であり、要介護1は5,734人の合計10,864人であった。

平成16年度初回調査の調査票の回収数は、要支援が3,878人（回収率75.6%）、要介護1が3,724人（回収率65.0%）で、合計7,602人（回収率70.0%）であった。これらの回収数のうち、有効回答数は、要支援が3,859人（99.5%）であり、要介護1が3,714人（99.7%）で、合計7,573人（99.6%）であった。

平成16年度初回調査に回答のあった者のうち、転出と死亡を削除した者に平成17年度1年後調査を行った。

平成17年度1年後調査の調査票の送付数は、要支援は3,742人（初回調査回収者の96.5%）であり、要介護1は3,528人（初回調査回収者の94.7%）の合計7,270人（初回調査回収者の95.6%）であった。

平成17年度1年後調査の調査票の回収数は、要支援が3,055人（回収率81.6%）、要介護1が2,751人（回収率78.0%）で、合計5,806人（回収率79.9%）であった。

平成16年度初回調査と平成17年度1年後調査の縦断での有効回答数は、要支援は2,895人（有効回答率94.8%）であり、要介護1は2,623人（有効回答率95.3%）で、5,518人（有効回答率95.0%）であった。

平成16年度初回調査および平成17年度1年後調査のいずれにも有効回答した者のうち、2年後の要介護度と統合できた者は、19市町村の要支援が2,103人、要介護1が1,715人で、合計3,818人であった。

1) 基本属性

性別は、要支援および要介護1ともに「男性」は2割強、「女性」は8割弱を占めており、性別については要支援と要介護1の間に有意差は見られなかった。

年齢層区分は、要支援および要介護1ともに「65歳から74歳までの前期高齢者」は3割弱、「75歳以上の後期高齢者」は7割強を占めており、年齢層区分については要支援と要介護1の間に有意差は見られなかった。

家族構成は、「一人暮らし」は要支援では4割弱、要介護1では3割弱を占めており、要介護1に比べて要支援が「一人暮らし」が有意に多かった。(表1)

表1 平成16年度調査時の基本属性

項目		要支援	要介護1	人(%) χ^2 検定
性別 (3,818人)	男性	509 (24.2)	428 (25.0)	n.s.
	女性	1,594 (75.8)	1,287 (75.0)	
年齢	平均±SD	78.6 ± 6.6	79.2 ± 8.0	**
年齢層区分 (3,818人)	前期高齢者	559 (26.6)	461 (26.9)	n.s.
	後期高齢者	1,544 (73.4)	1,254 (73.1)	
家族構成 (3,766人)	一人暮らし	784 (37.8)	469 (27.7)	***
	一人暮らし以外	1,289 (62.2)	1,224 (72.3)	

n.s.:not significant, ** $P < 0.01$, *** $P < 0.001$

2) 各項目と2年後の要介護度の推移

(1) 基本属性

性別は、要支援では、「男性」は、改善・維持群は5割弱、悪化群は5割強であり、「女性」では、改善・維持群は5割強、悪化群は5割弱であった。

要支援では、性別と2年後の要介護度の推移との間に有意な差は見られなかった。

要介護1では、「男性」は、改善・維持群は7割弱、悪化群は3割強であり、「女性」は、改善・維持群は7割強、悪化群は3割弱であった。

要介護1では、「女性」に比べ「男性」の方が有意に悪化群の占める割合が多かった。

(表3)

年齢層区分は、要支援では、「前期高齢者」は、改善・維持群は6割弱、悪化群は4割強であり、「後期高齢者」は、改善・維持群は5割強、悪化群は5割弱であった。

要介護1では、「前期高齢者」は、改善・維持群は8割弱、悪化群は2割強であり、「後期高齢者」は、改善・維持群は7割弱、悪化群は3割強であった。

要支援および要介護1ともに「前期高齢者」に比べ「後期高齢者」の方が有意に悪化群の占める割合が多かった。(表4)

家族構成は、要支援では、「一人暮らし」では、改善・維持群は6割弱、悪化群は4割強であり、「一人暮らし以外」では、改善・維持群は5割強、悪化群は5割弱であった。

要支援では家族構成と2年後の要介護度の推移との間に有意な差は見られなかった。

要介護1では、「一人暮らし」では、改善・維持群は8割強、悪化群は2割弱であり、「一人暮らし以外」では、改善・維持群は7割弱、悪化群は3割強であった。

要介護1では「一人暮らし」に比べ「一人暮らし以外」の方が有意に悪化群の占める割合が多かった。(表5)

基本属性のいずれもすべてのカテゴリーにおいて、要介護1に比べ要支援の方が悪化群の占める割合が多かった。

表3 性別にみた2年後の要介護度の推移 人(%)

要介護度	性別	改善・維持群	悪化群	χ^2 検定
要支援 (2,103人)	男性	253 (49.8)	255 (50.2)	n.s.
	女性	872 (54.7)	723 (45.3)	
要介護1 (1,715人)	男性	279 (65.2)	149 (34.8)	**
	女性	948 (73.7)	339 (26.3)	

n.s.:not significant, ** $P < 0.01$

表4 年齢層区別にみた2年後の要介護度の推移 人(%)

要介護度	年齢層区分	改善・維持群	悪化群	χ^2 検定
要支援 (2,103人)	前期高齢者	322 (57.7)	236 (42.3)	*
	後期高齢者	803 (52.0)	742 (48.0)	
要介護1 (1,715人)	前期高齢者	355 (77.0)	106 (23.0)	**
	後期高齢者	872 (69.5)	382 (30.5)	

* $P < 0.05$, ** $P < 0.01$

表5 家族構成別にみた2年後の要介護度の推移 人(%)

要介護度	家族構成	改善・維持群	悪化群	χ^2 検定
要支援 (2,073人)	一人暮らし	442 (56.4)	342 (43.6)	n.s.
	一人暮らし以外	673 (52.2)	616 (47.8)	
要介護1 (1,693人)	一人暮らし	381 (81.2)	88 (18.8)	***
	一人暮らし以外	832 (68.0)	392 (32.0)	

n.s.:not significant, *** $P < 0.001$

(2) 治療中の病気・入院経験

治療中の病気は、要支援では、「あり」、「なし」とともに、改善・維持群は5割強、悪化群は5割弱であった。

要介護1では、「あり」、「なし」とともに、改善・維持群は7割強、悪化群は3割弱であった。

要支援および要介護1ともに治療中の病気の有無と2年後の要介護度の推移との間に有意な差は見られなかった。(表6)

過去1年間の入院経験は、要支援では、「あり」は、改善・維持群6割強、悪化群は4割強であり、「なし」は、改善・維持群5割強、悪化群は5割弱であった。

要介護1では、「あり」および「なし」とともに、改善・維持群は7割強、悪化群は3割弱であった。

要支援および要介護1ともに過去1年間の入院経験の有無と2年後の要介護度の推移との間に有意な差は見られなかった。(表7)

表6 治療中の病気の有無別にみた2年後の要介護度の推移

要介護度	治療中の病気	人(%)		χ^2 検定
		改善・維持群	悪化群	
要支援 (2,103人)	あり	356 (52.5)	322 (47.5)	n.s.
	なし	769 (54.0)	656 (46.0)	
要介護1 (1,713人)	あり	442 (71.6)	175 (28.4)	n.s.
	なし	784 (71.5)	312 (28.5)	

n.s.:not significant

表7 過去1年間の入院経験の有無別にみた2年後の要介護度の推移

要介護度	入院経験	人(%)		χ^2 検定
		改善・維持群	悪化群	
要支援 (1,964人)	あり	374 (55.7)	297 (44.3)	n.s.
	なし	673 (52.0)	620 (48.0)	
要介護1 (1,615人)	あり	471 (71.6)	187 (28.4)	n.s.
	なし	685 (71.6)	272 (28.4)	

n.s.:not significant

(3) 転倒経験

過去1年間の転倒経験は、要支援では、「あり」は、改善・維持群は5割弱、悪化群は5割強であり、「なし」は、改善・維持群は6割弱、悪化群は4割強であった。

要介護1では、「あり」は、改善・維持群は7割弱、悪化群は3割強であり、「なし」は、改善・維持群は7割強、悪化群は3割弱であった。

要支援および要介護1ともに「なし」に比べ「あり」の方が有意に悪化群の占める割合が多かった。(表8)

要介護度	転倒経験	改善・維持群	悪化群	χ^2 検定
要支援 (2,006人)	あり	466 (47.6)	514 (52.4)	***
	なし	610 (59.5)	416 (40.5)	
要介護1 (1,656人)	あり	653 (69.2)	291 (30.8)	*
	なし	528 (74.2)	184 (25.8)	

* $P < 0.05$, *** $P < 0.001$

(4) 主観的健康感

主観的健康感は、要支援では、「健康ではない」は、改善・維持群は5割強、悪化群は5割弱であり、「健康である」は、改善・維持群は6割弱、悪化群は4割強であった。

要支援では「健康である」に比べ「健康ではない」の方が有意に悪化群の占める割合が多かった。

要介護1では、「健康ではない」および「健康である」ともに、改善・維持群は7割強、悪化群は3割弱であった。

要介護1では主観的健康感と2年後の要介護度の推移との間に有意な差は見られなかった。(表9)

要介護度	主観的健康感	改善・維持群	悪化群	人(%)	χ^2 検定
要支援 (2,053人)	健康でない	671 (51.1)	641 (48.9)	**	
	健康である	433 (58.4)	308 (41.6)		
要介護1 (1,675人)	健康でない	807 (71.3)	325 (28.7)	n.s.	
	健康である	392 (72.2)	151 (27.8)		

n.s.:not significant, ** $P < 0.01$

(5) 老研式活動能力指標

老研式活動能力指標得点は、要支援および要介護1ともに手段的ADL、知的ADL、社会的活動度および合計のいずれにおいても、「維持・改善群」に比べ「悪化群」の方が有意に低かった。(表10)

表10 2年後の要介護度の推移別の老研式活動能力指標得点

要介護度	項目	要介護度の推移	人数	平均値	標準偏差	t検定
要支援	手段的ADL (1,944人)	維持・改善	1,049	4.1	1.3	***
		悪化	895	3.2	1.7	
	知的ADL (1,942人)	維持・改善	1,036	3.1	1.1	***
		悪化	906	2.7	1.3	
	社会的活動度 (1,953人)	維持・改善	1,041	2.2	1.4	***
		悪化	912	1.7	1.4	
	合計 (1,769人)	維持・改善	948	9.4	2.9	***
		悪化	821	7.6	3.5	
要介護1	手段的ADL (1,569人)	維持・改善	1,116	2.7	1.8	***
		悪化	453	1.5	1.5	
	知的ADL (1,586人)	維持・改善	1,130	2.6	1.3	***
		悪化	456	2.1	1.4	
	社会的活動度 (1,581人)	維持・改善	1,122	1.6	1.3	***
		悪化	459	1.2	1.1	
	合計 (1,444人)	維持・改善	1,022	6.8	3.5	***
		悪化	422	4.7	3.1	

*** $P < 0.001$

(6) 認知症早期発見スクリーニング指標

認知症早期発見スクリーニング指標得点は、要支援では、「悪化群」に比べ「維持・改善群」の方が有意に低かった。

要介護1では、「維持・改善群」と「悪化群」の間に有意な差は見られなかった。(表 11)

表11 2年後の要介護度の推移別の認知症早期発見スクリーニング得点

要介護度	要介護度の推移	人数	平均値	標準偏差	t検定
要支援 (1,875人)	維持・改善	1,007	2.8	1.2	***
	悪化	868	3.0	1.1	
要介護1 (1,558人)	維持・改善	1,108	3.0	1.1	n.s.
	悪化	450	3.1	1.1	

n.s.:not significant, *** $P < 0.001$

(7) 生活習慣

生活習慣得点は、要支援および要介護1ともに「維持・改善群」に比べ「悪化群」の方が有意に低かった。(表12)

生活の規則正しさは、要支援では、「規則正しくない」は、改善・維持群は5割弱、悪化群は5割強であり、「規則正しい」は、改善・維持群は5割強、悪化群は5割弱であった。

要支援では「規則正しい」に比べ「規則正しくない」の方が有意に悪化群の占める割合が多かった。

要介護1では、「規則正しくない」は、改善・維持群は7割弱、悪化群は3割強であり、「規則正しい」は、改善・維持群は7割強、悪化群は3割弱であった。

要介護1では生活の規則正しさと2年後の要介護度の推移との間に有意な差は見られなかった。(表13)

表12 2年後の要介護度の推移別の生活習慣得点

要介護度	要介護度の推移	人数	平均値	標準偏差	t検定
要支援 (2,103人)	維持・改善	1,125	4.3	1.9	***
	悪化	978	3.9	2.0	
要介護1 (1,715人)	維持・改善	1,227	3.9	1.9	***
	悪化	488	3.5	2.0	

*** $P < 0.001$

表13 生活の規則正しさ別にみた2年後の要介護度の推移

要介護度	生活の規則正しさ	改善・維持群	悪化群	人(%)	χ^2 検定
要支援 (1,986人)	規則正しくない	188 (49.0)	196 (51.0)	*	
	規則正しい	879 (54.9)	723 (45.1)		
要介護1 (1,617人)	規則正しくない	226 (69.5)	99 (30.5)	n.s.	
	規則正しい	927 (71.7)	365 (28.3)		

n.s.:not significant, * $P < 0.05$

(8) 咀嚼能力

咀嚼能力については、要支援では、「かめない」は、改善・維持群は5割弱、悪化群は5割強であり、「かめる」は、改善・維持群は6割弱、悪化群は4割強であった。

要支援では「かめる」に比べ「かめない」の方が有意に悪化群の占める割合が多かった。

要介護1では、「かめない」は、改善・維持群は7割弱、悪化群は3割強であり、「かめる」は、改善・維持群は7割強、悪化群は3割弱であった。

要介護1では咀嚼能力と2年後の要介護度の推移との間に有意な差は見られなかった。
(表14)

表14 咀嚼能力の有無別にみた2年後の要介護度の推移				人(%)
要介護度	咀嚼能力	改善・維持群	悪化群	χ^2 検定
要支援 (2,012人)	かめない	307 (48.8)	322 (51.2)	**
	かめる	776 (56.1)	607 (43.9)	
要介護1 (1,657人)	かめない	388 (69.2)	173 (30.8)	n.s.
	かめる	793 (72.4)	303 (27.6)	

n.s.:not significant, ** $P < 0.01$

(9) ADL

ADLは、要支援では、食事以外の項目において、「自立」に比べ「要介助」の方が有意に悪化群の占める割合が多かった。

要介護1では、すべての項目において、「自立」に比べ「要介助」の方が有意に悪化群の占める割合が多かった。(表15)

ADL得点は、要支援では、「維持・改善群」と「悪化群」の間に有意な差は見られなかった。

要介護1では、「維持・改善群」に比べ「悪化群」の方が有意に低かった。(表16)

表15 ADL別にみた2年後の要介護度の推移

要介護度	項目		改善・維持群	悪化群	χ^2 検定
要支援	食事 (1,962人)	要介助	18 (47.4)	20 (52.6)	n.s.
		自立	1,044 (54.3)	880 (45.7)	
	着替え (1,958人)	要介助	15 (33.3)	30 (66.7)	**
		自立	1,042 (54.5)	871 (45.5)	
	入浴 (1,947人)	要介助	28 (25.2)	83 (74.8)	***
		自立	1,027 (55.9)	809 (44.1)	
	移動動作 (1,913人)	要介助	37 (43.0)	49 (57.0)	*
		自立	989 (54.1)	838 (45.9)	
	歩行 (1,879人)	要介助	40 (27.4)	106 (72.6)	***
		自立	970 (56.0)	763 (44.0)	
	トイレに行く (1,954人)	要介助	7 (28.0)	18 (72.0)	*
		自立	1,041 (54.0)	888 (46.0)	
	大小便の失敗 (2,000人)	あり	299 (43.6)	386 (56.4)	***
		なし	778 (59.2)	537 (40.8)	
要介護I	食事 (1,597人)	要介助	32 (44.4)	40 (55.6)	***
		自立	1,104 (72.4)	421 (27.6)	
	着替え (1,593人)	要介助	78 (45.3)	94 (54.7)	***
		自立	1,056 (74.3)	365 (25.7)	
	入浴 (1,583人)	要介助	235 (53.8)	202 (46.2)	***
		自立	891 (77.7)	255 (22.3)	
	移動動作 (1,547人)	要介助	90 (55.6)	72 (44.4)	***
		自立	1,013 (73.1)	372 (26.9)	
	歩行 (1,518人)	要介助	202 (54.9)	166 (45.1)	***
		自立	879 (76.4)	271 (23.6)	
	トイレに行く (1,593人)	要介助	42 (39.3)	65 (60.7)	***
		自立	1,090 (73.4)	396 (26.6)	
	大小便の失敗 (1,637人)	あり	497 (64.7)	271 (35.3)	***
		なし	671 (77.2)	198 (22.8)	

n.s.:not significant, * $P < 0.05$, ** $P < 0.01$, *** $P < 0.001$

表16 2年後の要介護度の推移別のADL得点

要介護度	要介護度の推移	人数	平均値	標準偏差	t検定
要支援 (1,803人)	維持・改善	973	5.2	0.6	n.s.
	悪化	830	5.2	0.7	
要介護1 (1,447人)	維持・改善	1,036	5.0	0.9	***
	悪化	411	4.6	1.3	

n.s.:not significant, *** $P < 0.001$

(10) 外出頻度、外出範囲

外出頻度は、要支援では、「1週間に1回未満」は、改善・維持群は4割弱、悪化群は6割強であり、「1週間に1回以上」は、改善・維持群は6割弱、悪化群は4割強であった。

要介護1では、「1週間に1回未満」は、改善・維持群は6割、悪化群は4割であり、「1週間に1回以上」は、改善・維持群は8割弱、悪化群は2割強であった。

要支援および要介護1ともに「1週間に1回未満」に比べ「1週間に1回以上」の方が有意に悪化群の占める割合が多かった。(表17)

外出範囲は、要支援では、「自宅の敷地内」は、改善・維持群は4割弱、悪化群は6割強であり、「自宅の敷地外」は、改善・維持群は6割弱、悪化群は4割強であった。

要介護1では、「自宅の敷地内」は、改善・維持群は6割強、悪化群は4割弱であり、「自宅の敷地外」は、改善・維持群は8割弱、悪化群は2割強であった。

要支援および要介護1ともに「自宅の敷地外」に比べ「自宅の敷地内」の方が有意に悪化群の占める割合が多かった。(表18)

表17 外出頻度別にみた2年後の要介護度の推移

要介護度	外出頻度	改善・維持群	悪化群	人(%)	χ^2 検定
要支援 (1,968人)	1週間に1回未満群	95 (35.4)	173 (64.6)	***	
	1週間に1回以上群	965 (56.8)	735 (43.2)		
要介護1 (1,611人)	1週間に1回未満群	269 (60.0)	179 (40.0)	***	
	1週間に1回以上群	880 (75.7)	283 (24.3)		

*** $P < 0.001$

表18 外出範囲別にみた2年後の要介護度の推移

要介護度	外出範囲	改善・維持群	悪化群	人(%)	χ^2 検定
要支援 (1,981人)	自宅の敷地内	134 (37.6)	222 (62.4)	***	
	自宅の敷地外	929 (57.2)	696 (42.8)		
要介護1 (1,615人)	自宅の敷地内	334 (62.2)	203 (37.8)	***	
	自宅の敷地外	822 (76.3)	256 (23.7)		

*** $P < 0.001$

(11) 屋内・外出時の家屋上の制限

家の中に段差等不便な場所があり行動が制限されることの有無は、要支援では、「あり」は、改善・維持群は5割弱、悪化群は5割強であり、「なし」は、改善・維持群は6割弱、悪化群は4割強であった。

要支援では「なし」に比べ「あり」の方が有意に悪化群の占める割合が多かった。

要介護1では、「あり」は、改善・維持群は7割弱、悪化群は3割強であり、「なし」は、改善・維持群は7割強、悪化群は3割弱であった。

要介護1では家の中に段差等不便な場所の有無と2年後の要介護度の推移との間に有意な差は見られなかった。(表19)

家から出るときに段差等があり外出が制限されることの有無は、要支援では、「あり」は、改善・維持群は5割弱、悪化群は5割強であり、「なし」は、改善・維持群は6割弱、悪化群は4割強であった。

要介護1では、「あり」は、改善・維持群は7割弱、悪化群は3割強であり、「なし」は、改善・維持群は7割強、悪化群は3割弱であった。

要支援および要介護1ともに「なし」に比べ「あり」の方が有意に悪化群の占める割合が多かった。(表20)

表19 家の中の段差による行動制限の有無別にみた2年後の要介護度の推移 人(%)

要介護度	行動制限	改善・維持群	悪化群	χ^2 検定
要支援 (1,924人)	あり	260 (49.7)	263 (50.3)	*
	なし	782 (55.8)	619 (44.2)	
要介護1 (1,569人)	あり	393 (68.3)	182 (31.7)	n.s.
	なし	722 (72.6)	272 (27.4)	

n.s.:not significant, * $P < 0.05$

表20 家から出るときの段差による行動制限の有無別にみた2年後の要介護度の推移 人(%)

要介護度	行動制限	改善・維持群	悪化群	χ^2 検定
要支援 (1,932人)	あり	233 (47.4)	259 (52.6)	**
	なし	810 (56.3)	630 (43.8)	
要介護1 (1,574人)	あり	414 (68.4)	191 (31.6)	*
	なし	711 (73.4)	258 (26.6)	

* $P < 0.05$, ** $P < 0.01$

(12) 他者との交流

同居の家族との付き合いの程度は、要支援では、「なし」は、改善・維持群は5割強、悪化群は5割弱であり、「あり」は、改善・維持群は6割弱、悪化群は4割強であった。

要介護1では、「なし」、「あり」とともに、改善・維持群は7割強、悪化群は3割弱であった。

要支援および要介護1ともに同居の家族との付き合いの程度と2年後の要介護度の推移との間に有意な差は見られなかった。(表21)

別居の親戚や兄弟姉妹との付き合いの程度は、要支援では、「なし」、「あり」とともに、改善・維持群は5割強、悪化群は5割弱であった。

要介護1では、「なし」は、改善・維持群は7割強、悪化群は3割弱であり、「あり」は、改善・維持群は8割弱、悪化群は2割強であった。

要支援および要介護1ともに別居の親戚や兄弟姉妹との付き合いの程度と2年後の要介護度の推移との間に有意な差は見られなかった。(表22)

友人・知人との付き合いの頻度は、要支援では、「月に1回未満」は、改善・維持群は5割弱、悪化群は5割強であり、「月に1回以上」は、改善・維持群は6割弱、悪化群は4割強であった。

要介護1では、「月に1回未満」は、改善・維持群は6割強、悪化群は4割弱であり、「月に1回以上」は、改善・維持群は8割弱、悪化群は2割強であった。

要支援および要介護1ともに「月に1回以上」に比べ「月に1回未満」の方が有意に悪化群の占める割合が多かった。(表23)

近所付き合いは、要支援では、「なし」は、改善・維持群は4割強、悪化群は6割弱であり、「あり」は、改善・維持群は6割弱、悪化群は4割強であった。

要介護1では、「なし」は、改善・維持群は6割弱、悪化群は4割強であり、「あり」は、改善・維持群は7割強、悪化群は3割弱であった。

要支援および要介護1ともに「あり」に比べ「なし」の方が有意に悪化群の占める割合が多かった。(表24)

表21 同居の家族との付き合いの程度別にみた2年後の要介護度の推移 人(%)

要介護度	付き合いの程度	改善・維持群	悪化群	χ^2 検定
要支援 (2,103人)	なし群	753 (52.6)	678 (47.4)	n.s.
	あり群	372 (55.4)	300 (44.6)	
要介護1 (1,715人)	なし群	815 (71.9)	318 (28.1)	n.s.
	あり群	412 (70.8)	170 (29.2)	

n.s.:not significant

表22 別居の親戚や兄弟姉妹との付き合いの程度別にみた2年後の要介護度の推移 人(%)

要介護度	付き合いの程度	改善・維持群	悪化群	χ^2 検定
要支援 (2,103人)	なし群	881 (53.4)	770 (46.6)	n.s.
	あり群	244 (54.0)	208 (46.0)	
要介護1 (1,715人)	なし群	1,005 (70.7)	417 (29.3)	n.s.
	あり群	222 (75.8)	71 (24.2)	

n.s.:not significant

表23 友人・知人との付き合いの頻度別にみた2年後の要介護度の推移 人(%)

要介護度	付き合いの頻度	改善・維持群	悪化群	χ^2 検定
要支援 (1,747人)	月に1回未満群	183 (48.4)	195 (51.6)	**
	月に1回以上群	780 (57.0)	589 (43.0)	
要介護1 (1,391人)	月に1回未満群	282 (63.1)	165 (36.9)	***
	月に1回以上群	723 (76.6)	221 (23.4)	

** $P < 0.01$, *** $P < 0.001$

表24 近所付き合い別にみた2年後の要介護度の推移 人(%)

要介護度	近所付き合い	改善・維持群	悪化群	χ^2 検定
要支援 (2,000人)	なし	66 (41.0)	95 (59.0)	**
	あり	1,013 (55.1)	826 (44.9)	
要介護1 (1,627人)	なし	140 (56.2)	109 (43.8)	***
	あり	1,025 (74.4)	353 (25.6)	

** $P < 0.01$, *** $P < 0.001$

(13) 役割・活動への参加

家庭内での役割は、要支援では、「なし」は、改善・維持群は5割弱、悪化群は5割強であり、「あり」は、改善・維持群は6割弱、悪化群は4割強であった。

要介護1では、「なし」は、改善・維持群は6割強、悪化群は4割弱であり、「あり」は、改善・維持群は8割、悪化群は2割であった。

要支援および要介護1ともに「あり」に比べ「なし」の方が有意に悪化群の占める割合が多かった。

地域での役割は、要支援では、「なし」は、改善・維持群は5割強、悪化群は5割弱であり、「あり」は、改善・維持群は6割強、悪化群は4割弱であった。

要支援では、地域での役割と2年後の要介護度の推移との間に有意な差は見られなかった。

要介護1では、「なし」は、改善・維持群は7割強、悪化群は3割弱であり、「あり」は、改善・維持群は8割強、悪化群は2割弱であった。

要介護1では「あり」に比べ「なし」の方が有意に悪化群の占める割合が多かった。

地域での活動への参加は、要支援では、「なし」は、改善・維持群は5割強、悪化群は5割弱であり、「あり」は、改善・維持群は6割弱、悪化群は4割強であった。

要介護1では、「なし」は、改善・維持群は7割弱、悪化群は3割強であり、「あり」は、改善・維持群は8割弱、悪化群は2割強であった。

要支援および要介護1ともに「あり」に比べ「なし」の方が有意に悪化群の占める割合が多かった。(表25)

表25 役割・活動参加の有無別にみた2年後の要介護度の推移					人(%)
要介護度	項目	有無	改善・維持群	悪化群	χ^2 検定
要支援	家庭内での役割 (1,830人)	なし	374 (46.9)	424 (53.1)	***
		あり	610 (59.1)	422 (40.9)	
	地域での役割 (1,932人)	なし	917 (53.2)	808 (46.8)	n.s.
あり		125 (60.4)	82 (39.6)		
	地域での活動への参加 (1,972人)	なし	724 (52.0)	668 (48.0)	**
		あり	340 (58.6)	240 (41.4)	
要介護1	家庭内での役割 (1,523人)	なし	585 (64.7)	319 (35.3)	***
		あり	495 (80.0)	124 (20.0)	
	地域での役割 (1,587人)	なし	1,049 (70.3)	443 (29.7)	*
あり		77 (81.1)	18 (18.9)		
	地域での活動への参加 (1,613人)	なし	920 (69.5)	403 (30.5)	**
		あり	225 (77.6)	65 (22.4)	

n.s.:not significant, * $P<0.05$, ** $P<0.01$, *** $P<0.001$